負暖録

二

特別
イ4
1919
107

176391

○釋迦の傳記に關する說

一大偉人の出で、浴天の教化を布きうる數の代者を始め、
一流の教祖となるべき基礎を後の仰慕を集め、其人の人
格を集注し其人一生の事業を事實化し理想化し
傳說を附會相加へて終に事實の那邊なるかを
知ること能はざるに至るもの多し佛陀
の一生のことも亦然り而の面目は遂に佛陀
慕の中心となるべき其傳記を先づ民間の說話と結び
して本生即菩薩譚 Jataka となる此後佛の
佛傳は此等の本生譚を附加し、佛陀の後說次第に來るも

38- 8913

実を基礎とし今日の傳説は北欧の佛傳の中より一種史的事実の核心あるものを共傳説を加味して事実と不一致なるべし、若し佛陀の真相を知らんと欲せば能く其所説の佛教説話を分析せざるべからず、左の如きもの説話の分析の一つなり

佛傳の中に印度古来の風習佛教の混淆せるもの

事実なるべき佛の生れ家なるべき婆羅門の吠陀を学びし代武術を学びしこと、婆羅門の梵志時代に和合し其の事を要求せざるを婆羅門の家庭時代に其の出家修行せる間を即婆羅門の森林期なること、其の説法を説きしは石婆羅門

の苦行時代なること、国王を何んの人も此の如き生活の時期を経ること自然の勢なれども佛傳の野蛮時代の区劃を分つべきものの如きは其傳説の多き婆羅門の四時期に模倣せしの跡を認めざるべからず

西洋の学者の内佛教を以て太陽神の説なりと説くものあるもケルン氏の如きケルン氏の如きケルン氏の説を巧みを学んで之を拾ひケルンの考えを佛教の発生せしめ阿育王の時代にあるも此のみき教ゴ傳はるし間に其信仰等ゴ婆羅門教中の太陽英雄神説を利用して教祖なる者の傳を組織し之を道徳教訓に用ひしなれば或は

又他の方にて説かれし大概紀元前三百年の頃に教化を布きし人なりとし之を太陽神話と結合せしものなりとも佛傳を太陽神話とするケルン氏曰く佛は人天に勝れたる神にして太陽の如く一切勝れたるなり佛の本師永恒不滅なれども其化身Avatara合身の人間として生れ又死せんと太陽は日々毎に出でて西に入りて生死を反復せるが如く此娑婆世界をキリストなる者として太陽神話を英雄譚とせしが如く、佛傳も亦太陽神話の一変方に起りて偉人傳と成りしなり、只佛教を軍に英雄譚として終りて偉人聖賢傳となりて出家

修行の苦已者解脱者の事蹟となりしなり而して佛は始は俗人として生活せしが漸次苦に近き、終に正覚を得て一切人天を照せしなり日東天に出づるが如く漸次其光を増して夢睡裡の人を覚ます、其赫々たる光明を放つが如く佛傳は太陽神話を基として出化神話及涅槃神話を編成したる善巧方便なること、即十二因縁を年の十二月として佛は地理法を設けて太陽は十二月を化出せるが如く、其の丸初轉法輪の説法を中道の肝要なるを説くを太陽の中天を行くが如し其の象徴即伽耶尸梨沙山を説法山として地平線を出づるが如く

印度にては地平線を山と称し毘濕拏の三歩即日出、中天、
日没の中其の日没を北名称 Gayaçira と云ふことなりて
明なる所ハ佛ハ此説法を一の大事業を終へたることにて山
を下りけり
佛の阿羅藍及鬱頭藍は根本をなし一事ハ特に太陽神
説の痕を示せり 揵頭藍とはウドラ Udra にかなへる
縮少詞カ Ka を加へし者にしてウドラとは濕潤の義
にして濕潤又アールドラ Ardra と云ふ而してアール
ドラは星の名にして a Orionis なり而して揵頭藍を又
ルドラカ Rudraka と称するは吠陀天文にて楼陀羅
を以て此星宿の主となすが故なり蓋し太陽がアリエス Aries

と同緯度なる時を基本とせば太陽ハ週間の後にては太
陽は a Orionis に近づきて星を見えざるなり、此を
以て佛弟子の目週了りて法を傳へんとする前
に揵頭藍ハ既に死せりといふ、次に阿羅藍迦藍
摩の名あるは此も亦星の名なるを示し、カラーパ Kalapa
と同じく月の義なり而して a Orionis なる星(印度にて
は鹿頭 Mrigaçiras)はアールドラが先き
にして星ハ表はる佛陀の説法せんとする時一週間前に死
したりといふ次第なり
釈迦種族の瞿曇 Gautama と称することも亦
星の名にして蓋し瞿曇と云へるも聖賢の名称之なり

帰して聖典を写し此書を印度に多き書中より（マハー
バーラタのぬき）佛の出るあるに闇黒より出でしを一般晦冥
ら天の一方に輝きて世をも照す太陽の出でしにたとへ或は
佛教の中の闇黒をブリハスパチ即木星と混同する
ところあるがゆゑに世の朝の明星にたとへるべし特に
律部（小品十二の章一の三）に闇黒を等日即太陽に似たる
る太陽に同じきといふ又かのぬきにて其確証する（下略）
古き婆羅門正統の印度宗教史家の筆になる猶し
附会する説なる観ずると蓋未だ叢迷をなし定まし
能はざるを以て貴道者の備ふる為ここに摘出す

○印度の婦人

近ころ西書に印度の婦人の不信を論する者を
あらはさず貝姆ヤスタラが花の集なる書を見し人
に至りては恐くはしめでもして婦人の冤を雪
くにてを要する為に随ひと佛家の排斥を
受けしを宣す印度婦人とは婆羅門婦の婚姻
の印度宗教史家を閲するに印度婦人の不信
会するとて強ひて之を言ふことなし佛降誕以前の
経典を曲解し言婦を禁じたりとなす者の
行為なしを以て一般を欲しとて諸の印度
教の婚姻制度の一班を挙げて婦人の状態を知る

つゝしみて為さん

太古印度に於ては異性の結婚を禁ずるに拘はらず、同胞同族同列の間に於ては結婚を禁じ、時間を制限し寡婦の自由を待つの能はず、ゆゑに而して偶を選ぶにあたりてのみ決して之を強ん

さるゝが為に終に早婚の弊を生ず、故に幼児の夭折を又多く未婚の寡婦を生ずるに出でたり、怪しみとなすべき弊害なり、弘と称の一つなるを(略)男子五十年又は八歳の結婚の式を挙ぐ、此を以て幼沖にして死するあれば其婚姻の妻を既に寡婦となす、此の寡婦に再婚を

許さゝることあれども再婚の禁を断じて許さゝる勢力を占めまゝ、其寡婦未婚なる幼女も婚姻の後、寡婦となる一生を送らるべきものなり

寡婦の禁婚と共に生じまゝしたる寡婦焚死印度の sati の俗習なるも、此習俗を国を九度なる行んざるしも、既に四世紀カ日王朝の九度なるヴラーハミヒラ Varahamihira 大夫死して寡婦の火に入るを賞讃すること著し

一般に焚死の俗を廃止すること四世紀なるも、之を強制せざるしなるも、此習俗を印度教と共

寶を行ひ喜興の再時を禁ずることを世に公行せん
ぬ十一世紀の史家アンベルニ Albericus
の記すところ殺人不共戴天の敵時
と未時とを問はず互を喜興のうえ之を
バ夫の火葬とせる焚死すること二者一を擇ぶを
要しとすること
近世北のごときこと喜興焚死の公行へるるも
るや印度教の之を実行し吠陀の典
説を曲解して之を典拠とするもを美し
梨俱吠陀（十世紀一八の七）に喜興のまを記し
て

東京帝国大学

北芸の世に喜興の業を受けさんかし、義云
うこと能はざりしき夫を特てる彼男を淨酪
を以て喜興のうえん
北芸のかき涙を流さず悲まず、侯者き
装飾を着けて立ちて
といへる句あるを見るべし（Agni）家の人
曲解――
夫の死を悲まず、印「火」とする喜興を
るもの、北のかき悲んで立て火の入るべしとする
さらに印度の書を引きて敵に怪
煙を表示して バビロンの印度
の模倣と称す

〆

此早婚及寡婦の然諾を即梵天式といふ
力を尊重して排斥せんとせしも其効力を認る
の制度を作りて寡婦禁死のことを禁止し得
又早婚を或分の制限をかく得たるも之を排斥する
の非常の困難なりしを此事なる印度教の六教
と結合して其痼疾となりしものなるべし

○婆羅門教の婚姻式

上陸の婚姻なるを以て聯合を造る
其方法八種あり

一 梵天式 Brahma-vivaha
女を盛飾し禮を具備して夫の父之を招く吠陀を通
達して德行ある人に嫁す

二 天神式 Daiva
女を盛飾し儀式を行ひつゝ祭礼供犠を司る爲
典

三 仙人式 Arsha
正法を従て夫なる牝牡牛各一頭若くは二頭を婿
て女を与ふ

四 波闍鉢提式 Prajapatya
父母人の義して婚姻の義務を全うせよ

といひ、禮を具備せしめ

五、阿修羅式 Asura

多くの財寶を生ずるなり

六、乾闥婆式 Gandharva

男女の愛情を伝ずる所なり

七、羅刹式 Rakshasa

暴力を以て女を奪ひ取る

八、畢舎遮式 Paisacha

女の睡眠酩酊又は生狂を乘じて之を奪ひ去る

以上我の中妃の四八会法を傳ずるなり

度ずる或る妃の上を会法と云ふなり

東京博覚製

○陸薬の彫刻

陸奥産陸薬と鄭重彫刻を施す家例

華族の印陸薬刻するなり、高貴の方

しく古中国祝ずるこを以て大人と慈愛を以名

大人光りあるを刻を以て、即ち其の印を

彫ずるなり

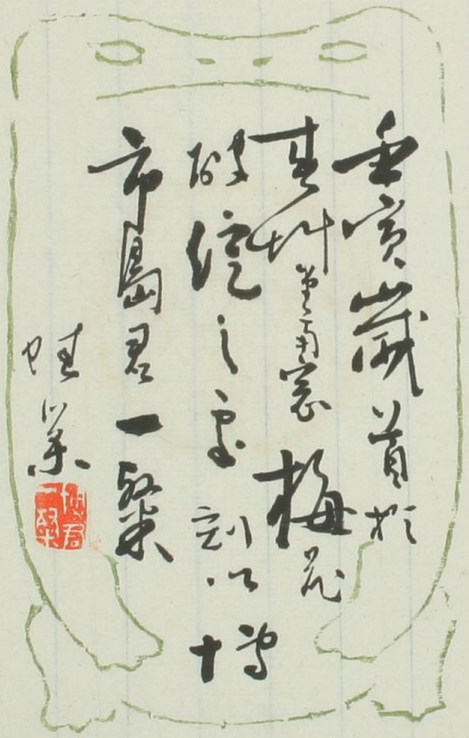
印影

壬寅歳首於書斎墨刻以博

市島春城一笑

陸奥陸薬

清泉堂



東京博文堂製

○豊臣秀頼短冊

豊臣秀頼書百人一首の内

誰をかも志る人にせん高さごの

まつもむかしの友ならなくに

の歌をかきたる短冊の一軸（古筆の極札あり）余

これを故海後宗中の筆跡なりとて得たるもの（印）

早きん浅川の本家より譲られしを秘蔵せしに

かつて御子早川早流来訪ありて、早川家の家に

あるに見せ奉りしに早川殿の銘を添へ給ふ

即ち早川家より遂に当家に伝はりし十五代才

ところの書なるん出来たる方なる君名のひ記

届きて短冊の欠損ある所を手鏡外しあらんとて

かつ早川の本書を存し銘しも以て左の如くしるせり

田中を匣の中に蔵すと云ふ（明治十年十二月記）

御軸物を為に詮なく秀頼を知る

なし凡そ十四五年時代の着色なるべく秀

頼を尊國を習せまんなる草書七八年頃の

書を継ぎ合せも御軸物は出来にくく短冊の

下部の頼字の完全なるを知るか手繰上げ貼

出罷ありしとるを取外しするにあるを自ら切ん

とりしたるなんと云ふ

○趙陶齋千字文

趙陶齋の千字文は、池上鴻雪翁の所蔵なるが、故に此の書を求めて、傳に趙陶齋肉筆真書千文を高くし、考くんと欲する賞八あるも一元殺ひ、きまりの也、明和丙戌春、晩年の書也、得本は、武蔵の国、杉戸宿、出仕

の所にて、陶齋の傳を、あらまし、趙陶齋名は、善、字は仲殿、一郭、息心、又息心、抱拙園、或は、清暉、陶齋の号あり、七歳の人、幼名は、竹孫、師の弟子、故、獨樂園、と、とも、迂、治と、天、ひ、通し、号、書を、配、て

世、長、ひ、信、ひ、ぶ、の、士、影、し、初の、江戸、の、中年、
浦、条、の、移、し、板、橋、所、堺、の、家、天、明、二、年、四、月、
廿、り、移、す、年、七、十、四、

○古代磁器錄

余コロボックル時代の土器の完全なるを、得んことを、欲して、久矣、こゝに、図、一、
磁器を、得て、こゝに、図、一、
こゝに、武、市、目の、後、考、
て、も、と、静、の、
書、の、後、
高、時、代、の、

津軽藩ヶ[illegible]ん年代抜もれ三千年を経つ云々

と

○時風の離

時風と都山の離おきたる時は二月三日の離の離数十五を除列して人の後を付し行を一巻し序上離の法華経を[illegible]ことし[illegible]ことを[illegible]

[illegible]偽[illegible]を教[illegible]し[illegible]を[illegible]

又偽[illegible]を集[illegible]時風の離除列[illegible]

[illegible]又行[illegible]時風の[illegible]

[illegible]十[illegible]

[illegible]時風[illegible]

[illegible]年一経の離を[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]を集[illegible]

[illegible]離を[illegible]

[illegible]と離の法華[illegible]

[illegible]法[illegible]

[illegible]

とゝに同校の時風を連載してこゝに掲げて
以て遺忘を補ひ其を何の材料となすべきを
考ふる

東京帝國大學

●雛人形談（一）

『雛人形談』は雛人形の所藏家として且つ雛人形の變遷沿革に精通する以て府下に名ある清水晴風氏の特に記者の爲めに爲せるものにて雛人形の如何なるものなるかを説いて餘蘊なし、我は世上の繁に倣ふて禁轉載の銘は打たず唯轉載者は『日本』の二字を毎紙の末尾に加ふることの注意は請はざるべからず（本欄擔任者某）

○御雛樣のことに就て聊かお話を致します、實は年々歳々皆樣に申上ぐるので別に變ッたことも御座いませんが、今日は諸國の御雛樣のことに就てお話を致しませうと考へます

○併しどうしても前には先づ此沿革を述べませぬと總ての要領を得られませぬから極雜に申上げますが、此の雛は實は二ッに區別してお話し申上ぐる方が順序がよいです一ッの方はツマリ神道で行ひます祓（ハラヒ）のこと――大祓と云ふ側から起ッて來ます、所謂祈禱的の方に屬して居りますもの、ソレからモ一ッの方は今日で申すと上流の方の家庭教育と云ふ性質を含んで居りますもので御座います

○祓と云ふ方はドウ云ふことかと云ふと、この子供の厄難を此者に負はせると云ふ意味なのです、是は隨分舊るいお話で源氏物語などに大分此事がございまして、又古歌などにもございますもうアノ頃には一般に行はれて居るに違ひありませぬ

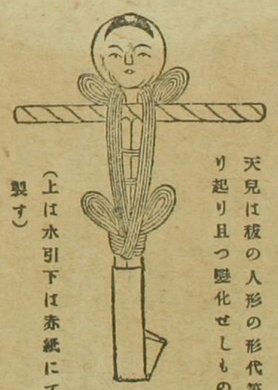
○此の祓と云ふ方に就てお話いたしますと祓と云ふことは極昔からあッたもので、支那にも此例がある、日本のはカタシロとかモノシロとか種々雜多なやり方がございまして、雛人形の始まりはツマリ此一種なのであります、それはドウ云ふ譯かと云ふと天兒（アマカツ）と云ふものを製しまして、前申す子供の厄難をソレに負はせると云ふので、是は手前の申上げます祓に屬した天兒と云ふものです、是は子供が產れますに先き立ッて自分の平素信じて居ります神官とか、或は陰陽師とか、又は僧侶とかに依頼いたしまして之に鄭重に祈禱して貰ひます、中には尊い經卷などを心（シン）にして造るとかいふことがありますが、兎に角祈禱をして彼の天兒を拵へて、それから子

供が産れますと其産れました子供と同じやうに之を扱ひます、着物なども子供に絹の着物を着せますと天兒にも絹の着物を着せる、子供が宮參りに行く時にも天兒も伴れて行く、子供を乘り物に乘せた時には天兒にも乘せると云ふやうに總て子供と同じやうな扱ひにします

○それから其後になッて御伽母子（オトギボコ）と云ふものがございます、此御伽母子は文字では母子と書くのでありまする、又はオボコ――所謂小さいと云ふ意味でありまする、それを後に這子（ハフコ）と書きました、伊勢貞丈などがさう言ッて居た、それだから是は決して立て丶置くものでない――所謂赤兒（アカンボ）は寢かしてあると云ふ所からして、それで此御伽母子は前にウツ伏せにしてある、此這子と云ふものが即ち御伽母子のことであると云ふことを伊勢貞丈が申して居ります

○ダガ此の天兒と云ふことに就ては說がないのでありまする、殆んど無いと云ッて宜い位、偶〻伊勢貞丈あたりが言ッて居るが、貞丈などの說に據りますと是はむづかしいもので無い、決して秘傳も口傳もないと云ッて居ります

○ガ一方では決してさうでない、御伽母子の天兒は餘程むづかしい造り方のものであると云ふて居るのもある、殆んど何れが何れだか分りませぬ、形が存して居るのでも無いのでありますから議論あるのも無理はない、然るに私が昨年天兒を造りまする仕方と天兒を備えますやうなことを書きました古寫本が一冊手に入りました、此古寫本は享保何年かでございます、さうすると貞丈より餘程前でございます、貞丈が既に言ッて居ることは其古寫本より後であります



天兒は殺の人形の形代等より起り且つ變化せしもの

（上は水引下は赤紙にて製す）

○先づ此古寫本を確實なものと見てやりますと幸ひ此古寫本には實地に此天兒を製しますに隨分明かに書いてあります、併せて御伽母子のこともある、又犬張子の事も書いてあります、總てアヽ云ふことが書いてあります、此古寫本の記しました製し方に據りまして初めて私が天兒を造ッて見ましたが、中〻是は寸法がむづかしい、總て斯う云ふことは秘傳とか、秘法とか云ふことがあッて極秘密にしてあるので、それが爲めに人が造らなかッたのです、所が此本を得まして始めて天兒の造り方を覺えました、既に小さく造ッて之をお成道のかなめ屋といふ織物屋に云ッて賣出した位のわけでございます

○デ、此御伽母子のことをモウ一應申上げます前に申上げましたのは母子とかオボコとか、這子とか申すだけであッたが、後世に至りましてこれが遊具になりました、昔の御大名、今は華族樣あたりの奥などでは此御伽母子を見た方も知ッて居る方もございませうが、後には此御大名の姫君が他へ御緣附きになりまして御輿入れの時には必らず携えて參られます、其携えて參りますのは殆んど私が前に申上げました天兒と同じとで御輿入の時乘物に乘られる時は御伽母子も同じく乘物に乘せると云ふ譯、さうして張子の犬と共に御寢所に備えて置きましたものです

○ソコで此張子の犬をば御宿直犬（トノヰ）とか、或は御伽犬とか云ふ名が附きましたが、同時に此母子にも御伽母子と云ふ名が附いたものと信じて居ります

○御伽母子は今日に存して居らない、何故存して居らないかと云ふに、ツマリ御嫁に入ッた方がモウ生涯御手許に置いて、さうして御自分が御逝去なされ（ナクナリ）ゝば御伽母子を燒き棄てるか、或は俱に埋めるとか云ふので從ッて其の形も後に殘らない、それから偶〻殘ッて現にあるのは既に私共も持ッて居りますが、これはドウして殘るかと申しますに貞丈の說では女の方の御伽母子は生涯手許に置いて其方が逝去ると同時に埋めると說いてありますが、男の方に拵へた天兒は男子の十五歲までは手許に置いて、十五歲以上になると神に――神前に納めて仕舞ふと云ふことが書いてございます、此神前だとか寺方だとかに納ッたものがタマに世に流布して今日に存して居るものと思ふのです、以上天兒と母子のことに就てのお話しです

○それが後の世に雛になッたと云ふは天兒でも或は母子でも其の形と云ふものは誠に繪に書き

ましては絹でこそ製りますが裸体の樣で極醜いもの、後に世が進むに從ッて裸体のものに誠に無雜作に着物を着せまして、今日ある立雛――俗に云ふ紙雛に變じたものと思はれます、又紙雛と云ふ名前がドウして附いたかと云ふに元祿時代の紙雛を見ますに此天兒、御伽母子に無雜作に紙を附けた紙雛――所謂紙ばかりで拵へました雛がある、それが時勢が進んで一層精巧になり、時勢の進む程これが華美になッて參りました、華美になッたから名稱も立雛とか又は紙雛とか申す樣になッたものと思はれます

○紙雛、立雛と云ふ部類のものは前に申しました祓から起ッて、天兒なり、或は御伽母子となり、後に此の雛の形になりましたのです、而して其の最初の目的は所謂新繪から起ッて人の厄難を此雛に負はせると云ふ方の一ッの迷信的から來たものでございます……

○それからお話が變はりまして、今日現存して居ッて誰しも三月の御節句に飾ると云ふ所謂內裏雛、或は親王雛といふもの、是はドウ云ふ所から起ッて來たかと云ふに、雛とは大きい物を小さく拵へる所謂雛形で、烏なぞも雛子と云ふ

御伽ほうこ、天兒(アマカツ)の一段變化したるもの、紙にて製す

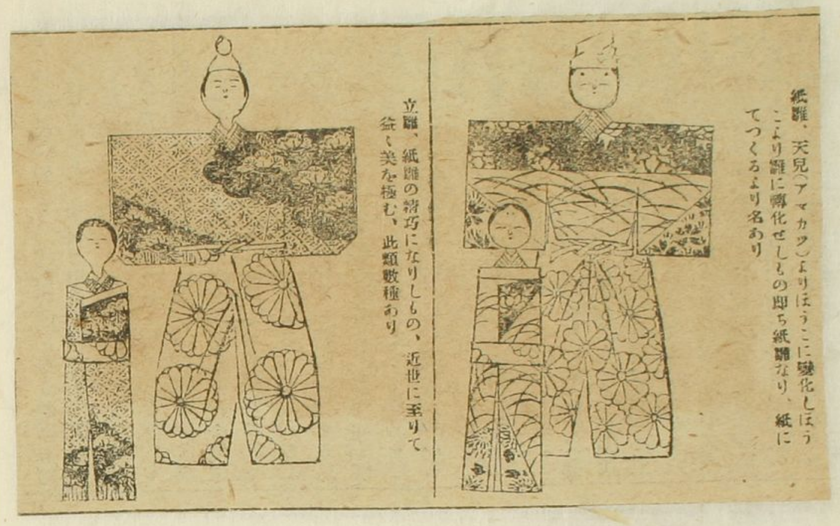
矢張り小さいから雛と云ふ文字を用ゆ、そんな意味で昔の唯大きいものが小さいものに出來たと云ふ話――、タガ、是は決して三月の節句とか、或は上巳(ジヤウミ)とかに祭るとか飾るとか云ふものでなく、昔は所謂上流の御姫樣が深念の下に養はれて世間――下樣(シモザマ)のことを御存知がない、デ夫婦間の情合とか、或は家政の事に就ての調度をば知らず識らずの間にお教へ申すと云ふ一種の蔑弄物に過ぎないので平素飾るものであります、今日子供がマヽ事をやるアレのヤヽ高尙なのである、後に德川樣の頃になりまして漸く五節句が定まりまして三月の節句に雛を飾ると云ふことになりましたが、これは決して最初の定めではない

○此の雛を飾るといふことに就て私の考へがございます、元は上流社會の蔑弄物でございまして、後にはこれが一種の飾とか祭るとか云ッて鄭重に扱ふことになりました、ト云ふは私の考へではモト雛と云ふものは高尙の風俗を寫しまして弄びに致しましたもので、それが一歩進んだのが所謂雛でございます、私の考へますに昔は下樣の極陋しい風俗は餘り繪にも書きませぬので、土佐流の所謂繪卷物を見ましても重に大內の事が書いてある、或は武具、武裝の者が書いてあるが、極陋しい方の風俗は書きませぬのであります、然るに段々元祿この方になりますと繪にも遊女、或は美人畫とか云ふ樣に段々に風俗が下の方に陋しくなッて來たと同じことで雛を弄ぶと云ふことも最初は成るべく上流の風俗を造ッて上流の方のオモチヤにしたものでございますが、此の民間の極下等の人までが之を飾るとか祭るとか云ふやうな一ッの制度が出來ましてからは立派な高尙な風俗が寫しあるものを隨分甚だしい取扱ひをするやうになりました

德川樣時代に雛を飾る雛を祭ると云ふことが三月の御節句に限られたのは是れは取りも直さず鄭重に取扱はせると云ふ用心であらうと思はれます、或は之を指して　天皇陛下の御姿だとか或は　皇后陛下の御姿だとか、種々雜多なことを申しますが、決してさう云ふ意味のものではない、後になりまして色〻名が附いて、或は內裏雛とか、或は親王雛とか、或は直衣雛とか云ふやうな名を無理に附けて尊い御姿にして仕舞ッた、それから冠は立体――纓を立てゝあるのも、或は金の冠を被せたのもありました所からやかましい制度が出て止められた品などが隨分ございましたが、餘り華美に流れまして其の結果は一ッの贅澤品になりました、所謂御趣意のあッた時に止められたことがございます

○先づ其雛の沿革に就てのお話は此位にして地方に依ッて雛の飾り方、或は扱ひ方、或は拵へ方のことに就て少しくお話いたします、さうすると自然と雛の性質が能く分るだらうと思ひます

先づ雛と云ふものは假りに江戸の雛として置きます、江戸の雛に就いてはドノ位の種類があるかと云ふに隨分に種類は澤山ございます、先づ次郎左衛門と云ふ雛がございます、それから芋雛、次に內裏雛、親王雛、直衣雛、之を數え上げますと殆んど幾種類あるか中々其種類と云ふものは澤山で之を一々書き立てますと容易なこ



紙雛、天兒（アマカツ）よりほうこに變化しほうこより雛に轉化せしもの即ち紙雛なり、紙にてつくるより名あり

立雛、紙雛の精巧になりしもの、近世に至りて益く美を極む、此類數種あり

とではないのでございます、先づ唯今私が述べましたことで最初お話しいたしますのは内裏雛内裏雛と云ふのは俗に極尊い方の風俗を寫しましたもので、それから親王雛と云ふと自然と違ひます、所謂親王の結束帶でございますから宜い袍などを着て居ります、さう云ふのは親王雛に屬して、所謂冠もそれに從つた冠を着せますそれから直衣雛と云ふものは是は極近世のもので、俗に大御所樣と云つた十一代將軍樣でございます、是は狩衣を召して居るのでございます一層精巧には出來て居りますが、御裝束が狩衣烏帽子、女雛は唐衣を着て居ると云ふやうなことで、冠が無いのが直衣雛でございます

○それから次郎左衛門と云ふ御雛樣、是は昔雛屋次郎左衛門と云ふ者德川樣の雛御用の人でございまして、これが製したのが次郎左衛門雛、是は極舊い所謂極圓るい御雛樣で、最も精巧なもの、何故精巧かと云ふに德川樣の御用をして居るので自然織物なんかも自由になりまして、京都の西陣へ德川樣御用と云ふ二字を用ゐて織らせにやりまして悉く大きなものを小さな形にツメて織りましたのを着せて居ります、隨分精巧なもので手前共などが次郎左衛門のを二三種持ッて居りますが着物の模樣まで小さくして有織模樣なんかは悉く取調たもので精巧と云ッたら此次郎左衛門のが一番宜からうと思ひます

○それから其の次は俗に云ふ芋雛でございます是は享保の時分に始まりまして、それから盛んになりました、後には子供の座ッた位の大さになッたが、此の芋雛も御趣意で止められました餘り華美に流れたからである、此芋雛はドウして芋雛かと云ふに顔が面長で、マルで絹カツギを剝いたやうな顔附きであるので、それから芋雛と云ふ名が附きましたのです、要するに芋雛は次郎左衛門雛の時代と敢て變はらない、そんなに差違はないが、此芋雛と云ふ方は一番能く行はれたものです、次郎左衛門雛は精巧でございまして、形は能く出來て居りますから、其の頃も矢張り上等の部類の雛、今日十軒店などで原秋月の御雛樣は一層精巧で價も貴いが、それと同じであッたから芋雛の方が普通に行はれて次郎差衛門の方は特別に精巧なものとして其時代でも得易くはなかッた

○それから前に述べまして寛永頃の雛は又形が餘程變ッて居ります、是は骨董集などにも出て居ります、伊勢貞丈の書いたのとは違ひますが此室町雛の女雛は檜扇などを持ちませぬで、手を一杯に擴げて居る御雛樣であります、これ所謂寛永頃の御雛樣であります

○次に骨董集にございます室町雛――、是は室町時代所謂足利時代の雛と申してあります、併し私共の考へますに斯う云ふ御雛樣の種類の變ッたのは、東京で云ふ十軒店の雛と云ふやうに西京の室町で製した一種の御雛樣で、室町雛と唱えるのだらうと思ひます、今日の所謂十軒店の雛と云ふものは矢張り十軒店式の御雛樣と云ッて差支はないのである、今日のは内裏雛とか親王雛とか、直衣雛とか云ふ區別はなく、是は内裏だ、是は親王だと申しまして其式に至ッては殆んど少しもないといふべき程である

○それから今日雛の上等と云ひ、中等と云ひ、下等と云ふは其の用ひてある切の好ひ惡るいに依ッて別けるのである外には何の意味もない、それで何れも玉眼になッて居りますが、併し此の玉眼は近世のもので、昔の雛は皆書き眼であッた、筆で書くのであるが、口などはあるかないか知れぬ位小さく附けましたもの、今日のやうな寫生的のものは決してないのでございます

○これから此雛に就て地方のお話をチョッと致しませうと思ひます、此地方に依りますと雛の扱ひ方、雛の飾り方が餘程違ッて居る所がある

先づ薩摩などのお話を致しますと薩摩様の御雛様は數が澤山ございます、私共にございますのばかりでも四五種ございます、其内に或は結構のものもあるし、又そんなでないのもあります先年薩摩様に出入りをして居た人の話に依りますと薩摩様では雛をドッサリ拵へる、節句の時に出入りの者が雛に對する御供之物を持ッて御殿へ出ると、其身分に應じて御雛様を下さるそれが爲めに常に御雛様を澤山貯へてあるとの話です

○それからモウ一ッ妙な風俗がございますと云ふものは、三月の節句に薩摩様の御藩中で最も身柄の良い方の令嬢與魔とか云ふ方が下女を伴れ、或は下男を伴れまして金助鞠を賣りに歩きます、是は大きな提燈を奇麗に拵へてた鞠でそれに色々裝飾の繪が書いてございます、名の聞えた威張ッた方の奥様令嬢が昔は薩摩様の御城下に賣りに出ます、それだから買ふ方の者がヘイ〳〵して、賣る方が威張ッて居る、そこで之を買ッてドウするかと云ふと幕を張りまして幕の所にズーッと並べて吊るす、例へて見やうものならば今日の店開きに酸漿提燈を掛けたやうに幕の所にズーッと金助鞠を下げる例なので餘程變ッて居ります、是は先年薩摩に參ッて金助鞠を商ふの現場を見て來た人の直話でございます

○薩摩の話に就て私が聊か感じたことがございます、琉球の雛は私共三四種材料を取ッて形に存して居ります、中には絵で取ッてあるのもございます、それで既に博物館などにもあるが、琉球のは紙で製してある、琉球の雛は薩摩にある雛と殆んど髣髴して居るので、此事に就て能くへますに、琉球の方の雛が轉じて薩摩の雛にッたのか、薩摩の方の雛が變じて琉球の雛にッたのか分らぬが、兎に角琉球のと薩摩のとし居りますので餘程面白味がある

○それから話が少しコチラの方に戻りまして蓋岐に一種違ッた雛がございます、此の雛は紙で拵へまして、東京にもない變ッて居る工合は前申上げました秡――カタシロのやうなものでございまして、是は何日飾るかと云ふに八月の朔日――舊の八月朔日――所謂八朔に之を拵へまして、初めて小兒が出來ると其親類などが之を造りましてツマグロ草を附けて贈ります、之を姫御前様と云ッて其御返禮には又何か報ひをすると云ふことでございます、兎に角八月朔日に姫御前様と云ふ雛を贈る所は讃岐でございます是も雛の一種でございます

○それから八丈の雛と云ふものが私共にもございますが、八丈のは紙製でございまして、なかなか情愛がございます、八丈と云ふ所は御案内の通り今日では何でもないが、昔は鳥も通はぬ云々と云ふ所で、トガ人とか、何とか云ふ者が流されて居て、其期節になりますと紙で其土地の風俗を拵へ、之を雛として聊か心を慰めたと云ふ、其情愛がこもッてございます、昨年私は某新聞に其形を書き、尾崎紅葉氏が賛をして出しました、私共にございますのは寫山樓文晁が持ッて居たものが轉々して私の藏になッて居るのでございます

○八丈でさへも雛は飾ります、それから唯今は無いのでございますが、伊勢の山田あたりに小米雛と云ふものを拵へます、小米雛と云ふは何でもないので、唯小さい――紙玉を頭にして、千代紙とか、或は白紙などで拵へまして、唯折り方に依ッて、男は前に折るとか、女は後に折るとかして別けてあります、中には紙で舘などが出來て居りますが、これが所謂小米雛で此事は骨董集などに詳しく出て居ります、其伊勢の仕方は知りませぬが、幸ひに米雛は二三種持ッて居ります

○又播州の方に參りまして高砂雛と云ふものがございます、是は極小さい、前お話をした紙雛で小さいが、模様などは一定の模様で誠に粗末のもの、是れが高砂の雛、外にはない播州に限るのであります

○それから紀州の淡島神社に參りますと此處で雛の御守りが出ます、其御守を戴いて居るのでありますが、緣起には神功皇后が三韓から御凱旋の紀念としてそれに少名彦汝（スクナヒコナ）を一緒にして雛にした、是は武運長久とか、息災延命とか、商賣繁昌とか、家内安全とかいふ樣に大層緣起に御利益が書いてある、今日亦之をも小米雛とも申しまして、雛の御守りが出ます其地方では雛の元祖は神功皇后、少名彦汝神を造りましたのが始めであると云ふのであるが、信ぜられない是れは所謂神様の一ッの緣起にさう云ふことを書きました丈のことで信ずるには足りませぬが、兎に角雛の形の御守は紀州淡島神社から出るのであります

○次に吉野に參りますと吉野雛と云ふものがあります、大和の三輪には三輪雛と云ふのがございます、此三輪雛とか、或は吉野雛と云ふもの

は其製作や何かに就て考へますと妙な考へが起ります、先年美術學校の武内さんが御用でアチラへ參りました、アチラの地方の御神体などを見ますに男女が束帶を附けて居るものが大分あるさうです、男女の所謂御神体で、これをば後に一緒にして其土地の者が祭るとか、飾るとか云ふことにしたのではないかと云ふ説がございます

○又た京都に參りますと鴨川雛と云ふのがございます、此の鴨雛と云ふものは總て楊の木で顔や手足は木地で彫刻がしてある、體だけは木目込み、糊附けて極込んでございます、是れは鴨雛と云ッて一種の雛でございます、それから伏見に參りますと、此處には例の伏見燒などで雛が出來て居ることなども御存じの事です

○ソレに深草には深草雛がございます、此伏見の雛の内は既に私共が持ッて居ります、裏に幸右衛門と云ふ名が附いて居ります、御案内でもありませうがそれは天下茶屋の所謂幸右衛門であるのです、今日幸右衛門と云ッては人が貴びますが幸右衛門はアテにはなりませぬ、伏見の雛と云ことは骨董集などにもあります

○それから雛に就て一番色〻のやり方をするのは三州でございます、三州の或る所では秋になりますと雛草と云ふ草——此草を乾しますと色は青うございますが、殆ど髪の毛のやうになるそれを以て製した雛がございます之には二ッありまして、一ッは東京で子供が翫んで居るアチ様の男女を拵へ、これを竹の筒の中に入れてズーッと下げ髪にして上に千代紙の着物を着せるのであります、モ一ッはヒメオリ雛、是は木の實で製したもので土地の人が自ら造ッて飾るやうなことがございます

○三州でおかしいのは雛を飾ると同時に天神様を飾る、雛を飾る間に一ッの天神様が居る、それは一ッの習慣で、手前も持ッて居りますが、雛と同じ様だが唯天神様の梅鉢の紋が附いて居るのが違ッて居る點で、殆んど男の方は今の男雛と取て變はらない、又別に三州の或る宮に納ッて居る雛がございます、是は充分に傳來は調べて見ませぬが、三州の宮に澤山納ッて居る、それを私は貰ッて持ッて居りますが、其の飾り方も色〻違ッて居るから詳しく取調べたら面白いことがあらうと考へます

○私は先年鴻の巣雛と云ふことに就て鴻ノ巣へ行つて取調べて見たことがありますが、鴻ノ巣には六七十年前には鴻ノ巣の雛と云ッて一體のもの——唯一ッのものがあッた、私共の持ッて居るのは高砂の尉と姥で、此の外に色〻ございますか知れませぬが、兎に角鴻ノ巣雛は是までにある雛と違ッて色〻の物の形がございます北車の人形——小さい花車で、後の方に花をつけ、前に鯉の瀧登りを置いたものです、所が今日ではさう云ふ雛はない、昨年の秋雛の視察をしやうと云ふので段々と聽き合はせましたらカリヤ新田と云ふ所で、御雛様を製造して居ると云ふから行ッて見ましたが、成程其一村は殆んど雛を製らない所はないと云ふ位盛んなものでございました、それから其内の最も大きな吉見屋と云ふ家に就て鴻の巣の雛の話を聽きましたが、殆んど分りませぬ——要領を得ませぬ、それから其吉見屋の出店だと云ふ家に就て段々話を致しました處、非常に喜んで呉れました、喜んでは呉れましたが、さて御雛様のことはサッパリ分りませぬ、仕方がないから責めてお前さんの知ッて居るだけのことを聽きたいと云ッたら、實は私共此通り盛んに製して居りますが、此鴻の巣で扱ふ雛は東京の雨國或は茅町で賣る極下等の雛であるといふ話でした、ダガ私の目的とした六七十年前の鴻の巣雛に就ての話は少しも要領を得なかッた、其の時鴻の巣の昔の御雛様はこれでございますと云ふて出して見せて呉れましたが、矢張り一体で、子供の肚衿を着て居るものでした、鴻の巣では之を飾りましたが今では殆んど飾る者もなくなりました、今は交通も便利になりまして、鴻の巣の雛の不完全なのよりは矢張り東京流のものでなければいけないと云ふので、今では昔の物は少しもありませぬ、私の知ッて居りますのは私の極幼少の時分には江戸に出まして江戸の柳原で舊い切を買ひまして、それを染返えして着せたと云ふことは私共が知ッて居る、鴻の巣の雛にも段々に變ッて今日は箇様になりました、私共が知ッてから三度程變更して居ります、併し今ではそれもなくなッて殆んど今日ではさう云ふお雛様を製するので、昔のものはない、年々新らしいのを製するので、昔の雛を製さないから鴻の巣の雛は全くなくなッて、唯江戸仕込の雛ばかりになッて仕舞ひましたといふて居ッた

○昔江戸で鴻の巣の様に安雛を製ッて居たのは何處かと云ふに江戸近在の越ケ谷です、越ケ谷雛といふものは雅致があッて、粗末なものではあるが面白味があッた、今日はソレも誠に稀れになッて仕舞ひました、其の外に加賀の雛、飛彈の雛といふものもあるが、奥羽の方は極めて少ない、松前には松前人形といふものがあッて其の内には雛もある

○それから合點首の雛と云ふのがある、是は首ばかりを人形——雛にする、それでドレにでも此の首を持ッて行ッて指して置くことが出來る何をしたからと云ッて嫌忌と云はない、それで合點首の雛——既に是眞なんかの繪にも合點首の雛がある、是は雛を持ッて居る人で雛の首をなくしたとか、鼠に破られたとかいふものは此合點首を揃めて置けば間に合ふので、今日でも能く賣れる、又た此首には大きいのも小さいのもあッたらしい、首ばかりを賣ると云ふことは昔からあッたことで、元祿の頃の雛人形は今日よりは盛んであッたらしい、其頃出來た雛は着せてある着物の金色なども今日まで少しも燒けもしませぬで殘ッて居ります、中〻精巧なもの丈け且つ盛んであッたらしいから合點首も從ッて賣ッたかも知れませぬ

○奈良は雛の極盛んな所であッて、私の持ッて居るのは杜園、一壽、桃源、松壽などゝ云ふのを持ッて居ります、奈良は御存知の通り木彫の着色したもので、奈良人形と云ふ一種の名物となッて居ります、是は人形に屬して居るものであるが、アスコの言ひ傳えには奈良の若宮八幡の御造營がある時毎に其の古るい材を以て一ッの一形を刻むと云ふことを申して居ります、之をば後に一ッの名物にしたのでありますが、初めは高砂の尉と姥とを刻んで之を若宮の御祭禮の時に寄附しまするのが例で、これが奈良の名物になる濫觴でございます、其形は古にあッたのでございますけれども名物になッたのは後のことです、一体奈良は天平の時分から彫刻の盛んな所で、其遺風が依然として傳ッて來て、さう云ふことからして今日奈良の人形は奈良の名物となり、奈良の土産物にしたものである、デ始めて之を盛んにしたものは御案内の森川杜園と云ふ人で、此の杜園が奈良人形の改良を加へまして盛んにしたのです、此杜園は帝國技藝員にもなッて極摸造が上手であり、殊に能狂言も上手であッたものであるから、奈良人形を能とか、狂言とか云ふ方からやりまして、一層奈良人形の聲價を揚げて來たのであります、杜園が故人になりまして今日は奈良人形は下ッて仕舞ッた、何故下だったと云ふに前のやうに繪の具を使ひ彫刻を完全にしては廉くは賣れない、廉くなければ買ふ者がないと云ふ所から自然と手を抜き、繪の具も西洋の繪の具を使ふと云ふやうになッて、今日の奈良人形は下つて仕舞ッた奈良人形をば一層精巧にし、一層盛んにしやうとした杜園の骨折りも今日は殆んど地に落ちて仕舞ひましたのであります

○淺草雛、是は杉廼舍親之と云ふ人がやりました、此の人は雨廼舍隣春と云ふ人の甥でございまして淺草人形を拵へたのでありますが、元此人は彫刻をやつたのではない、繪の方から彫刻を學んだので、或本には浙世の名人だと云ッて載せてございますが、なか〳〵の意匠家です、此人は杉廼舍と云ふ號を附けて居りますが、此の號は或る人が附けたので、杉と云ふは天狗が宿ると云ふので、天狗と云ふことを隱くして杉の舍と云ふことを附けたと云ッて居ります、是は土佐流の繪を書く人で、繪の方から彫刻に入ッて居ります、中々着色が精しいから、結搆なものがございます

○ソレから雛粟人形といふのは大阪でございます、西京のは加茂川雛といふに屬して居ります雛粟人形と云ふのは小さい人形と云ふ意味なのでありますが、此事に就て思附きましたのは池の端に長澤屋專助と云ふ家で此雛粟雛を造りました、殆んど一寸はない位小さいものでありまして、是は總て完全して居る——雛一對に五人囃隨身、官女まで出來て居る、俗に御部屋雛と云ふたものです、これには限りませぬが當時總べて小さいのは御部屋雛と云ふて居ッた、何故かと云ふに、昔御殿女中が所謂御部屋を持ッて居りますが、公然立派に雛を飾ると云ふことは出來ませぬ、女子のことでありますから三月になると雛が飾りたくなる、ソコで此雛粟雛と云ふのは一ッの箱に殘らず這入ッて居て飾ることが出來ますから、之を長澤屋へ行ッて買ッて參ります、誠に小さなもので何處へでも飾れるやうに出來て居ります、雛一式が一尺ばかりの箱にスッカリと這入ッて居る、これが長澤屋の一種の名物で、江戸名物詩にも長澤屋の事が書いてございます、それだから未だに道具屋などが小さい物で精巧なものを見ますと是は長澤屋のだと云ッて居ります、餘程少さく精巧に出來て居りますが、これが江戸の雛粟雛でございます

○手前どもが既に諸國の雛を持ッて居りますが數は殆んど六七十種もございます、マダ充分雛の製造だとか、雛の飾り方だとか云ふことは取調べない方の部分が多うございます、兎に角地方に依りまして雛と云ふもの丶形が變ッて居りますと云ふは今日其の現物を見ますと充分に要領を得られます

○此雛と云ふことは最初述べましたやうに必らず束帶を着けて居る今日十軒店の雛ばかりではないと云ふことは分ッて參ります、其の地方地方に依りて色丶の形がございまして、唯モウ其の時の風俗を寫したものもあれば又何だか分らないものもある、既にトシ雛と云ふ絲で卷き揚げる雛もある、それも手前どもにもありますが唯其土地に依りて造りますのでありますから今日それを見まして正しいの正しくないのと云ふことは言へない

○序でに聊か御話をしますが、昔雛屋立甫、誹諧師で野々口立甫と云ッた人——此の人は上手な人形師であッたが、其の當時風俗人形が大層行はれたので、束帶のものと、ソレから民間の風俗に似せたものと二通を造ッた、ソレには大きく造ッたのも、小さく造ッたのもあッて私共はドチラも持つて居ります、人形は前にも申上ぐる如く地方〳〵に依つて造り方が違ひますが其代はり雛の種類に依ッて其頃の人情とか或は其國は質素であッたとかなかッたとか云ふことが考へが附きますので、雛は一方から云へば一ッの道樂——一ッの好事に過ぎませぬが、若し之を澤山集めて色々地方〳〵の古の事を考へますと豫想外の利益が起るのであります

○私共なども矢張り最初品を集めますに何の考へもなく唯變ッて居る雛だと思ッたものは無雜作に手に入り次第に集めて參りました、今日はモウ其の集ッたものは一種でも人には讓れないやうになりました、と云ふものは前にも述べました通り、其雛を澤山集めまして其集めた内から考へますと色々其間に趣味のある考へが起りますので、殆んど今日は棄てることが出來なくなッて參りました、所が近頃此の雛と云ふものが一般に所謂流行の時になッて參りまして、或る部分では雛と云ふものを子供に買ッてアテガッて三月の御節句に飾ると云ふ側で流行して來る、ソレから或る部分では子供にアテガッと云ふよりはイッそ大人が雛を買ッて樂むと云ふ方から流行して參りました、一方の流行は十軒店に澤山あるから直きに得られますが、私共の流義の方の流行は新らしい品では滿足しない、形の變ッた品を得て始めて滿足しますので、この方は集めるには頗る困難の方なのであります

○前にお話し申上げた如く金でもある方はとても古いのは手に入らないから新らしく拵へさせたり、或ひは自分の意匠に依ッて種々雜多なものを造らせるといふ方が澤山出來て參りました併し是は金があッて唯其金の力に依ッて結構の彫刻家なり、或は何かに依賴して造りますのであります、兎に角私共のやうな貧生はさう云ふ眞似は出來ない、マア幸ひにして二十何年間か集めましたので少しばかり溜ッて居るので、お話をするにもそれに依ッてお話が出來ると云ふ一ッの種になりましたと云ふものは雛のことに就て大家が色々說を書いてございます、それは古寫本や古書に依ッて色々舊い書物を引用し或は源氏物語に斯う云ふ歌があるとか、斯う云ふ說があるとか、斯う云ふ文章があるとか、又は何々物語に斯う云ふ說があると云ふのが重もにこれまでの雛に關する說でありますが、私共が說を立てますには或は杜撰か知れませぬが、兎に角雛を集めました現物から一ッ行き、又古人の殘した書物から行きまして、さうしてやりますからマア誠に拙劣なお話ではございますが結局に行きますと御合點の行くやうなことになりはしないかと思ひます、私は誠に忙しい體で其忙しいと云ふものは無資產で、自分が稼がなければ妻子は養はれないと云ふ身分であるから短兵急にことをしやうと云ふことは出來ませぬ自分の持ッて居ります雛を先づ第一圖繪に致し之に說を附けて雛の考へと云ふやうな物を一冊生涯に殘して置きたいと思ッて居ります、さうすると是まで雛に就て古人が苦心した事、幷びに其現物に合はした私の說が出ますと潛越かは知れませんがマア完全したものが出來るかと云ふ考へでございます、私は唯今は業務の餘暇に羽子板と云ふものゝ考へを起しまして、これは既に着手して居りますが、本年中には成功するつもりです

○實は雛の話を致しますに就ては中々斯うやッてお話をしては順序が立たないので、何でも飾立てまして此雛はドウ、此雛はドウと云ッて御質問がございますれば、其御質問に應じて答辯をして完全なお話も出來ますが、唯自分の記臆して居ることを不順序にお話いたすのでありますから話に順序が立たないで御讀みになる方も或は御分りになりますまいと思ひます、兎に角

三月になりますと集古會に持出して人樣に御覽に入れるのは恥しいやうでございますが、又人樣の御請求に依れば仕舞ッて虫に喰はせるより皆樣の聊か御慰みになるやうなことならば飾らうと云ふ考へでございます

○ソレから終りに臨んで申上げて置きたいのは私共の雛の種類は殆んど六七十種もございます併し其種類は百種集めやうと云ふのが私の考へであッた、然るに前にお話申した通り、近頃は殆んど手に入りませぬ、これまでは一年に凡そ二ッや三ッは變ッた物が手に入りましたが、迚も今ではさう云ふことも出來ませぬから、本年は自ら造ッて百種にして揃へました、ツマリ七八十種ばかりと云ふものは材料がございましたので、其材料に依ッてうつしました、是も唯材料のやうに巧みには出來ませぬが、兎に角種があッたので皆樣に大きいのを御覽に入れるはナンであります、だから箱の中に綴ッて這入ッて居るやうに小さく寫しました、所でアトの二十種ばかりは材料がないのであります、所が材料がないから材料を待つと云ッては何日出來るか知れませぬ、ソコで私も考へましたに雛と云ふものは古人の拵へたものに據らないでも、古人の一つの意匠で拵へたものがそれが後に一ッの雛となッて、或は十軒店の雛にも、京都の室町の雛にも、又は甲州の花負ひ雛にもなる、又私の意匠で拵へたのは清風雛ともなるので、百種の内には元祿の風俗に造ッて見たり、或は御大名の社祢を召し奥樣はおかいどりを召して居るのを造ッて見たり、ソレからモッと舊い所は垣輪人形で造ッて見たり、又は神体を寫して造ッて見たり、又は前賢故實の中のものを造ッたりした最もおかしいのは萬葉集の樂は夕顔棚の下涼みと云ふ意味で造ッたり、或は大豆を以て造ッたり、或は數球玉で造ッたり、ソレから一刀彫りにしたりして漸く百種になッた、後にはこれが清風雛となれば結構なのであります、兎に角タダらないことを長く述べまして、誠に相濟ません、何れ他日又御質問がございますれば其御質問に就て聊か申述べる考へであります（完）

○五川流の真言

深秘邪教、經典の由緒、解釈の真言

の真言の由来、文の始る例

平安朝に於て蒲しき法師の例

於て蒲しき法師の例、妖怪と変化と傳

る、例、徒と卜占梵家の法も行ふ陰陽道

也、人、し平安朝に於て祈禱と例和して吉部

神道と真言密教北陸陰道と接近

一年に真言密教北陸陰道の卜占梵家

と密教を妨げず、北の接近例あり終に北陸

あへて一種の妖教を出す、これを真言五門

流とす由来真言金胎両部を立つこん理智の二
を表すとすれば二を曲解せんとの二を陰陽の二
とすることを、立てることを男女を配し男を決断の智あ
るいは智慧男の徳を具するとし女を慈悲の
徳あるとこれ平等の理則で胎蔵界の徳を具す
るとすること理智冥合を男女の交合とすること怪説
を出し男女陰陽の道をんで即身仏の秘術なし
身仏得道の法則のあるべきこと、瑜珈行品
の中に男女二根交合五塵成大仏事とあるを、無住
住に法欲即道恵癡無尽とあるを根據とし経
典を偽作し終の戒壇の上に男女和合するを

高野山の宥快の如き共喝食厳禁、北流共仮厳禁、
ちゃん共経を土中に埋しといくらも北面を今南は
俗間の信仰を繋き生殺為堂拝の如き解脱を
生ずるとの信仰の河の如き思ひ
代表的邪教といふ真言の学を学ぶ者、
北面をとるあるいは法華、仏智見の怪の境
界、見結つき彼我なえて金剛の幻、不思議の
四の時、法仏男女七理智の二法を出せめよ
しばらくとを見結の梁着七七宝無量
金をんどを受けて西東俗の邪法邪行をはじ
うあり文の料間のあしき者ども

加藤咄堂「近世の宗教風俗」

○学者天狗を信ず

迷信の盛んなりし時代にありては学者と雖も狐狸の妖怪を信じたるも、学者は幽霊なしとあるべきものを「これ皆狐狸の業なり」と幽霊を信ぜざるものなれども其の代りに狐狸の怪を信ぜしなり、されど学者の随を突いては必ず天狗ありとし、又中古天狗と云ふものは朝野共に信ぜられたるも、而して徳川氏の天下となりても此の迷信薄らぎかけしも益々学界となる学者尚ほ且つ真面目に其の存在を論ずる

なり、此の勢の赴く所殆んど一定すべき事なれども、尚ほ天狗の存する学者の説あり、以て此等の見解を摘録し一葉を挿まんとす

水戸の学者森尚謙曰く

世に伝ふ天狗なるものあり其の災禍を主る、是れ天狗星の下界に降りしものなりと、此説謬れり、以ふに天龍変天狗なる者これ一種の鬼神なり、所謂鬼神は盈を害し謙を福す、蓋し夫れ満盈を誇るものは鬼神之を悪む彼の天狗の災を為すも理なり

云々

朝川善庵曰く

狐ゟ天狐白狐玄狐ゟ各々年数を経る者の
ゟ天狐は六十ゟ古き狐ゟ勢力ゟ有左
ゟ之解ゟ有り一時千里風の如く往来ゟ此方の天狗或ハ
僧或ゟ山伏ゟ行者ゟ或ハ奇異の坊を化
人ゟ霊或ハ或ハ一ゟ天狐の間ハ、もしや天狗ゟ天
狐ゟハ有まじかゟ
僧門民の帝ゟ有ゟ光源院ゟ平出
羽国羽黒の風俗ゟ古の文書を載ゟ
来酉四月日光御社参被仰出候ゟ之
御山ニ住居ゟ天狗並降魔ゟ亦御社参

和漢名山遊覧御山の三足者也
文政七申年七月　水野出羽守

天　狗共
降魔亦共

来酉年ゟ日光御参詣被仰出ゟ的之
執権衆ゟ山中江狗札被ゟ之ゟ
軍法之御参詣中城州鞍馬並愛宕者
論遠州秋葉ゟ上州赤山ゟ山の者ゟ
集人花押

日光　大
小　天狗中

其の言葉に心を持たしむる得策なるべし

○特徴と称

[illegible]を乗り[illegible]を[illegible]ひ何う面白き書籍ちなば借りうけんとする人書架[illegible]

二三の海出を[illegible]し示さるゝをもんば

ラフカデオ、ハルン（Lafcadio Hearn）の

[illegible]の特徴材料を英語にしたるもの

[illegible] Adjacent Miscellany [illegible]ひて

Shadowings と題する書[illegible]ハルンを英

人[illegible]我国[illegible]久しく在[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]味を[illegible]

[illegible]しく信[illegible]

泉八雲と命じ現在帝国大学の教授

[illegible]文学の清新を占め[illegible]二書を以て人

[illegible]本の事物を[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の特徴[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

越後蒲原郡の諸産物を挙ぐること左の如し

外国人の目的なる所のものは、まづ第一番に米穀にして、次に蒲原郡人珍重するところの、茶の如きは、外国人の之れを賞する所以のものは、日本人の之れを賞するのと異なる理由なり、即ち邦人の諸産を賞するや、其産物の果敢なく悩んでいまだ外人を見ざるの如の出来の自然の美、絵画彫刻を以て賞するが如き其の一例なり、今試みに外人の極賞を博したる諸産を掲げて参考に供す

(一) 麦藁帽子　麦藁を似せたるもの、北海道にて製出せり、麦藁を一番早く出るとき、色の美なるを以て貴ばれたるなり

(二) 塩辛とんぼ　或は塩くとんぼ　黄色なるとんぼ　色の美なるを以て塩を貯へしなり

(三) 黄のとんぼ　黄色なるとんぼ

(四) 青とんぼ　色の美なるとんぼ　緑色のものもあり

(五) Gorhaki-Jombo

(六) 石松とんぼ　黒き色の美なるとんぼ　北海道にあり

(七) 小麦とんぼ　麦藁を以て製造せり

(八) つま黒とんぼ　翅の端黒色を帯ぶ

(九) 黒とんぼ　色の黒きもの、黒く見えるもの、北海道にあり

(十) 傘とんぼ　砲と色つぼんなる傘に似たるもの、北海道にあり

(十一) 鯨とんぼ　翅の後端の翅の後に似たるもの、北海道にあり

(十二) 猩々とんぼ　其色猩々のごとく赤きゆえ

(十三) 羽黒とんぼ　其羽くろきゆえ

(十四) 鬼やんま　形体大にして色黒く恐るべきの面あるも

(十五)

(十六) 生雲とんぼ　由来詳らかならず

(十七) 雲とんぼ　雲を乗りしゆえ角隠体の四方にくろくまりしゆえ

(十八) 鎧装とんぼ　黒色おびただしくとんぼ　色黑し

(十九) 四の字とんぼ　九とんぼを表者の色を言ふ

(二十) 柳生郎　形容の美なるゆえ

(二一) 赤衣使者

(二二) やんまとんぼ

(二三) 車やんま

(二四) 赤とんぼ　身体不全なる牧人のごとくなるゆえ

(二五) とうすとんぼ　身体大なる人の目のごとく節目あるゆえ

(二六) うちとんぼ

(二七) 豆とんぼ

(二八) 首とんぼ　矢頭を駄を物とブツつけるゆえ　直ち首

(二九) 飯とんぼ

(三〇) 黒崎とんぼ　色の緑なる山とんぼ　山とんぼの

(三一) 小山とんぼ　山とんぼ　数々ありて

(三二)

次上

若者らの俳句を拙なくも時匂の程度を
四大おのおのとなりて黄、緑、黒、赤の四種なれども
美種なれば早くも発生し緑青黒の三種を大自然の
俳句に生じ赤種を最後に来る又二種の俳句後
と記せり
若者が我の詩を歌ふ俳句を紙
に表現せんとせば左の如くなるべし
月を仰ぎもつぱらかやと思ふのまど
世界を笑ふ俳句を以て俳句をうたふ
俳句あつ―拙きうかやと思ふのまど
と記ひしが秋風のもとに立つる

秋の俳句

と記ひて俳句を作りたる
若者を育みたる詩人ピア、ロテの俳句も亦
の一句を見れば、拙しと雖も詩人を俳句を
世間の影響を受くるを嘆すと雖も
左の数句を例に挙げけり
うしろうつくつくうたふ俳句
山の麓の百の高の俳句
雲のうたひあつさや雲の俳句
あ拙を俳句をふ詩人の流の俳

遠く北樹くらき所の餘の影
又餘のかぎり〳〵とまつる樹をよゝあるかを
風をゝふく餘のすゝあるを一ト木うゝふ
又餘の影をムーウェングヽフオースとしてよゝある
ちなし
餘の影樹くらき動て風もなし
竹くまを雪くらを立し餘の影
もろ影ゝ山や動くうる樹々の餘
或は餘の影をみて海潮の影のひくあるを
ひさうくらを表とのつの餘の井うふ
表えてのうあるでうをうを餘の影

東樓房製

或は岐路を餘のうあるを
あるかけの樹々の細きを餘の影
樹系を一ツをまを餘の影
或は滑稽をよゝあるもあるを
時をうを樹くらを松の影
樹ゝるしをもを餘の影
或は餘の影のやゝ
餘を出て落るもどるをみうふ
餘のかるあるをうをゝさよ松の影
或は餘ををゝふをうを長をおんを
面をうをいをや我此の影ハうい森木の

餘の作

哀しき哀れなる孤獨の樹よ
汝の枝をば吹くそよ風
あゝ二三を有つ葉一枚を

Alas! poor solitary tree! pitiful now
your lot — every
breath of air having drawn awaked
up by the Semi-
—
when the Semi clear their stormy
Oh! how refreshing to shallows!

東京帝國大學圖書

Gratefully thus resounds the mu-
sical Speech of the pine

若者を餘の樹なれ八九を寄せ〻る島の風
あるを知らず、餘の影頭を傾ける同胞
吟ずるを聞くと呼ぶ諸聲を各々頭の美
なるを好きなるべしと云ふの樂流れを周圍
なる親愛なる、異國の和歌の響
ぬるをも傷つくと誤解しあること

○生弦巫祭祭

生弦巫祭祭を英語にPhallacism とも、或は男根崇拜とも称するも不適切の感あり。かれ自身の力を以て動用する男根を崇拜する生殖器崇拜を生ずるなり。

殊崎正流の示教を振仰ぐに、地の生殖祭祭は世界の古代より後及び今日に亦、オシリスの生殖力を表するに大なるものアルスを以て之を祭りて行列をなすなり。而して一切生産を司るなり之を祭りなる共他スカンディナヴィアの男根の崇拜も、英国の青一の祭礼共通なるべしと云ふ、印度の湿婆流の淫

海の威力を牛及生殖器の表象として之を祭し、道教の生殖器を祭祀するなり。日本の民俗も男根を崇拜し、平安朝以来男子の陰部を祭るなり。是等の人は天狗とお多福との面を表象して当時も生殖器崇拜の暗戦代表なり。聖天の祈禱亦同じ。

また於ける生殖器崇拜を上流の者は陰戦と称するのみ。然共其表象は、のうぶの花菖蒲のうぶ、お産出産の日本家風俗は其の例を多く有ける。

上皇下皇の俗語に生殖器崇拜を日本国中の二三を挙げん

東京帝国大学図書館

いつんの記事も其路を辿りあさるまを行けんと関東
より奥羽に入りて弾丸黒石に行屋を於て八上兵衛郎
うめ公記北北にて男子の生殺を記すと云
み又上毫仕後年者偶ハまゝ薬の為くて
出村の西に泉を求めんとすること四月十四日に未
ると化れる男根を拾ひ行きて大きさ五寸ばかり
髣髴たる霊物なりと雖も大なるを
惜すとも云へ浅草観音の大なるや
奥羽に金精峠と云ふあり日光山志はに記して曰く
湯平より西北の間に金精峠と唱ふる峠あり
往古より険隘の路を傳ひ行くこと一里半の

東京博覧会

路を経て峠に登る金精の社あり一里ばかり
登ると又半里の峠あり金精峠と
称する小祠あり祭祀ひろく行はれ
めとりて細工を盛に男根をもて祭祀とす
十九日に自然の男根交合の形状なる木の
根株を納めたる社を祈る験あり
と今も絶て祭祀を示すと奥羽に於ても
シセイと称して生殖を崇拝する
年特産現七六地方
陸中陸奥中部北奥羽の俗にて
奥羽の生殖崇拝の本旨

生年姉崎宗氏の調査される「中奥氏宮の伝仰」の
記事に曰く「奥州の「リンガ」出羽「氏」は其の名の猥褻
なるを恐れて男根をリンガ、女根をヨニといふ印度
語を用ひられたるもの」の行はれし事は既に奥州藤原氏の時代
の地方と共通を詳にす故に奥州藤原氏の時代
六十六の絵馬「リンガ」を作りて奥州に出でたりと伝
へらるの東中野の「リンガ」の如きも其一なりと云ふ其
八幡北南高行の中の如きもの
なりたるか

岩代国福島市の北信夫山の頂上

陸奥国宮城郡村道祖神社

〃　愛宕村道祖神
〃　仙台市大念寺内道祖神（ひらき屋）
〃　陸中一ノ関道祖神
〃　北川三峯神社内
〃　水沢市立神社内
〃　前沢町民家
〃　太田代道祖神社内
〃　郡山赤石神社内
〃　東光寺所龍都寺内道祖神
〃　東中野村和賀神社
〃　生保内村生保内神社

諸国民富豪編入の地名を考とし、又は「リンガ」を考究せしも至れりとなすの
い考察し「リンガ」なる「ヨニ」を付へるものあるも
川崎博のみきりえんるし「リンガ」を記紀方言金勢
（コンセイ）称と称する事一般なる「ヨニ」なるもの
なのみ、「リンガ」をみるべい所「リンガ」を以て称
体とするも、実は男根図柱即塞の
称なりといひ、「ヨニ」は淡島の作なりとし、或は
なる穴なるを「ヨニ」とし宗教上信仰観念又は
祀観念と称する説開伊郡とあるとし、「リンガ」及
「ヨニ」は本来の祀えんるものを考ふ

東京博覧会

ここれを解釈したるもの」と
称前説の誤を出羽の生殖器崇拝を記
したるを紹介

○唐の宝教崇拝

生殖器の崇拝を天地宝教の形代なる牛殖器
崇拝なりとなすもの、多数元近とする
事特別の事なり、生殖器を男の陰部を異
なるも、而も
多数を陽とし、もしもの事実生殖器の
事実の手段なるも妙なる
の宝教概論

先の宗教病理学を左の如く解し
宗教病理学を宗教の中に起る病的現象を研究す
れんとする是れ不得已仏伝と迷信とを判ちて病的現
象といふべきなり宗教的意識の一部を偏重の元
進を減退を生ずと病理を以て
不調を生ずと病理を以て
学者病理の部目を微細を病因とする多き微細の部を
曰く
色慾元進の其根拠天然宗教の時代を生強
のもの多く人の注意を惹くべき生強の力を宗教
しかも多く生強宗教を祈願する者

也宗教の既に道徳的中に発し病的
元進を生ずる事多く病理を何人の時
代の宗教にも共通に存在し殊に仏教
其自身主要微細なる教理を生つるを以て
の微細の重点を時勢の後徴として存する
ものにして色慾元進を其根拠とする事明
瞭外の異状として出つる事多く色慾
病を色慾元進を[illegible]之を宗教
発表せしめ之を代理病を宗教澄明
求め宗教を教化する事多し
之を病理を病態と元進を色慾を湯之

[illegible]の[illegible]と[illegible]特別為[illegible]と[illegible]病[illegible]
上有る[illegible]すべ[illegible]
色黠[illegible]元進の[illegible]数の代理[illegible]を[illegible]毎の中[illegible]
色黠元進の[illegible]を[illegible]進し[illegible]大[illegible]国[illegible]
[illegible]の天[illegible]の遺[illegible]を[illegible]
[illegible]し支[illegible]を[illegible]
之を例すれば[illegible]の世界[illegible]拜流の[illegible]色黠
元進の[illegible]擢未[illegible]、印地流[illegible]の生[illegible]
力を[illegible]の活動力[illegible]し一切の力を[illegible]生
頭力[illegible]之を[illegible]拜し[illegible]理的組織[illegible]
[illegible]世界[illegible]の色黠元進を[illegible]進一[illegible]

[illegible]の数比儀[illegible]の中[illegible]を時[illegible]
[illegible]之を[illegible]
[illegible]を[illegible]
不行ハ[illegible]世界の[illegible]
之を儀[illegible]の[illegible]肝要[illegible]
之[illegible]黠元進の微[illegible]の現[illegible]ハ
セム民族の中[illegible]フェニケア及バビロン人の現
[illegible]世界イスタムテーの[illegible]ハバビロン
[illegible]ベルと[illegible]世界アスタルテ
ハ生命の母生産の世界、生殖の保護界
[illegible]バビロンの[illegible]の男[illegible]

[illegible]

耶和米亜、ヘロード メス、ストラボ、ポンペイ等陽地を

[illegible]

我国[illegible]真元の中[illegible]秘密[illegible]

[illegible]行事[illegible]流[illegible]の真元[illegible]

一流[illegible]、北流を保元の法[illegible]卿[illegible]陰陽

[illegible]、道教[illegible]北[illegible]似、[illegible]俗法

[illegible]男女混雑[illegible]淫[illegible]を行[illegible]

羽化登仙の方法と化し、張道陵の黄書[illegible]男女

和合[illegible]文[illegible]三五七の法[illegible]流き[illegible]

[illegible]男[illegible]集

[illegible]淫[illegible]を方[illegible]

[illegible]文車[illegible]、而[illegible]道

[illegible]の徒[illegible]陰陽を用ひ[illegible]

[illegible]を淫[illegible]

我師教我金丹経、使我専心養金華、三五七

九還復精、呼吸玉池入玄冥、道平等昇

太清、

金華[illegible]玉池[illegible]穴殿の渓[illegible]

[illegible]元道[illegible]

其中に悪玉淫蕩の主なるものが出て来て之を以て人
間を、善悪の元道は又一種仏教の成立ちを出て、其
宗教的関係を無法情の如くに成すること之を内部に
者を忘れて、ただ宗教的なる形式は当
然ともなる貴僧等を新しく其の信仰を表明する
事なし、昆紐流の其形式なるキリシナに新しく
善悪を分ちたるの如き又バビロンのベル神の殿堂
なる其六万尺なる高塔ベルの金像を拵え傍
の華麗の寝床を設け婦人を侍せしめ
神の国悪の代表に成り、善く神を敬する者
悪を又其の宗教の立場を新しくも、ただ
の

うバはも悪元道の宗教なるが其流なるを流の
教なるを大主の宗教なる其教なるを仏教
仏の音楽を作り其の十人の大法を非常の教
を行へり、真宗仏者が法を新するの教の成
情を思ふに一の教なり
宗教なる教なる者悪元道の性質として注目すべき
は其の教の隠微なる表象なる仏教なる
なる者なるを教の天地観なる者方
現象なる者性を陰かして或を天の関係
を作れるを仏を立なる者なる者悪元道
の流徴へなく地の如き天地観を陰今に種々

の神話を基礎として共徴派を基礎、即イスタルトの女神信仰を附加而性の合一を表し
たるセム民族のめきたるを知るべし後徴派はスイスタルト盤偶の色彩充溢たるきを
即ち男の淫逸流るゝを淫逸とするべんワヂーとの交媾を渇仰して共信を生ずるを男女抱合の徴とし或を二神の
山上に住して放逸の淫乱をなすを行仰して之を
信ずるを自然の充溢たる色彩を代理的に満足
せり

（第三）ヴラバ流るゝを思想するキリシヤ教

るゝを信者を望み時として女子の能力を以て
色彩錯綜の流儀を発し色彩錯綜を
地獄の宝物まで〳〵スリアのヒーロポリスを
指すアスタルテの初るゝを神の犠牲を供
ふるを男子を生殖の術を断ち女非を同じ
くするして大なる之を喜び地獄祭を行ふ者市
中を徘徊する人々之を施らし女の衣装
師を設けるゝ、ウエベしの女神業師を共
僧侶を世子の風を〳〵ん神を微細しるゝと
色慾錯綜を特徴の者あるを信者の候流
宗教の者紙地地なるゝを文化を基しき者と

東京博文堂製

東株屋製

以下全て

白　紙

明治三十五年
三月三日
春城學人